

「チョコレート色」の猫

—色名の具体性と抽象化—

村中 淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

“Chocolate Colored” Cat

: Concreteness and Abstraction of Color Names

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

Key Words: the Origin of Color Names, Simile, Sweetness, Dark Brown, Foreign Words

要旨

「チョコレート色」という色彩を表す語が、どのような範囲のものを形容できるのか、コーパス検索によって調べた。その結果、「チョコレート色」は自然物・人工物を広く形容できる語であることがわかった。サイズや厚み、柔らかさ、温度感にかかわらず、光沢のある焦げ茶色のものに使える。ただし概ね美的なものを形容するケースが多い。チョコレートの持つ甘さ・快さという感覚的な性質が「チョコレート色」の活用につながり、使用が広がる契機となったのではないかと考えられた。

1 はじめに：「チョコレート色」という語

チョコレート色，という語がある。たとえば小説家村山由佳のエッセイに，猫に関する次のような描写がある（下線は本稿筆者による）。

Yさん宅の前，道路と畑の境目のところに，白っぽい猫がうずくまっている。むこう向きに香箱を作っているので，茶色い尻尾と耳の先が目立つ。近づいてゆく私の足音にこちらをふり返った顔も同じく，美味しそうなチョコレート色をしていて，瞳は透きとおるようなブルー。

（村山由佳『命とられるわけじゃない』，2023年，集英社文庫，53頁）

顔と耳、手足と尻尾はチョコレート色。肩の窪みのところがうっすらココア色。それ以外の毛は優しいミルク色で、どこを触ってもふわふわのつるんつるんだ。

(同上, 105 頁)

同じ猫について、他の部分で、次の記述もある。

猫だ、猫がいる。子猫とは言えないけれどかなり小柄で、どうやらシヤム系の雑種らしい。胴体は優しいクリーム色、顔の真ん中や各パーツの先っぽは焦げ茶色で、瞳はアクアマリンみたいなブルーだった。

(同上, 20 頁)

つまり、シヤム系の1匹の猫の、顔と手足の先と尻尾の色を、「チョコレート色」「茶色」「焦げ茶色」と描写している。「チョコレート色」というのは、「焦げ茶色」という代わりに「チョコレートのような焦げ茶色」を表すために使われているのであろう。

「チョコレート色」と同様、「〇〇のような色」を指して「〇〇色」と呼ぶことはよく行われる。しかし、「〇〇色」の「〇〇」には、何でも入るわけではない。「きつね色」はよく聞くが「たぬき色」は聞かないし、「油揚げ色」「豆腐色」も聞かない。「桜色」「バラ色」は聞くが「鶯草色」「ラフレシア色」は聞かない。「チョコレート色」は聞くが「マドレーヌ色」「マシュマロ色」は聞かない(同じ菓子関係で言えば、「キャンディカラー」はありそうだ)。「頭がプリン」とはいうが、「プリン色」とはあまり言わないのではないか。

つまり、「〇〇のような色」という意味の「〇〇色」において、「〇〇」に入るものには、制限がありそうである。

また、たとえば「チョコレート色」であれば、「チョコレート色のチョコレート」とは通常あまり言わなさそうであるが、「チョコレート色の猫」は言えるわけである。「チョコレート」と「猫」には、色以外に共通点がなさそうである。「A色のB」のBは、Aとどのような意味の関係にあるだろう。Aと同一ではないもので、色がAと共通であれば、どのようなものもBに入りうるのだろうか。

本稿では、「チョコレート色」の使用状況を見ることから、「〇〇色」について考察する手がかりとしたい。

2 色の名前について

2.1 色の名前は数百ある

日本の色の名前には、「赤、白、黒、青」の基本色名をはじめとして、「紫、緑」のように構成要素に「色」を含まない色名のほか、構成要素に「色」を含む色名、すなわち、「空色、水色、瑠璃色、桜色、薔薇色、藤色、堇色、桃色、茜色、栗色、小豆色、小麦色、

からし色、きつね色、ラクダ色」などがある。江戸時代には「四十八茶百鼠」という言葉があり、「鶯茶」「芝翫茶」「葡萄鼠」「利休鼠」など多くの茶色と鼠色が流行したとのことである（清野・島森 2005）。

外来語の色名も多く、「オレンジ、グリーン、グレー、ベージュ、アイボリー、セピア、ゴールド」などの単純形のほか、「オフホワイト、コバルトブルー、エメラルドグリーン、ローズピンク、シルバーグレー、ブルーブラック」などの複合形がある。「セピアいろ」「うすピンク」のような混種語もある。

色名辞典には、数百の色名が掲載されている（尚学図書（1986）には 358 色、その新版である小学館辞典編集（2002）には 500 色が掲載）。その数百の中にはごく近い色合いを指すものも多く、人の目はその数百を全て見分けているわけでは必ずしもない。それにもかかわらず、なぜそれほど多くの色名が存在するのか。それは、色名が人の歴史や文化と関わりながら名付けられ、発展してきたものだからである。また、色名というのは、ただ単に、あるいは厳密に、色を指し示すためだけにあるのではなく、雰囲気やイメージを伝える働きも持つ。おそらく、基本的な色名（赤、白、等）とその組み合わせ（赤茶、青緑、等）やそれを形容するいくつかの語（薄い、濃い、明るい、暗い、澄んだ、濁った、等）だけでは、人々の表現意欲をまかないきれないために、様々な色名が新たに作られたり、外来語として取り入れられたりするのであろう。

色名リストの一つの基準のような存在として、JIS（日本工業規格）の慣用色名「JIS Z 8102 物体色の色名」があり、269 色が定められている（島森 2021, 日本色彩学会 2011）。これは、クレヨンや絵の具などの工業製品の色の表示を統一するために JIS 色名委員会が 1955 年に発足し、1957 年に最初の「JIS Z 8102」が制定され、2001 年に改正されて現行の JIS となったものである。269 色のうち和名 147 語、英名 122 語である（日本色彩学会 2011）。

2.2 色名の由来

島森（2021）によれば、色名には、(1) 植物由来の色名、(2) 動物由来の色名、(3) 食べ物・飲み物の色、(4) 宝石・金属の色、(5) 自然関連の色、(6) 人名由来の色、(7) 地名の色、がある。

最も多いのが(1)の植物由来の名前で、全体の三分の一近くを占めるとのことである。花の色（桜色、菖蒲色、バイオレット等）、果実や野菜の色（レモンイエロー、トマトレッド等）、葉や茎の色（草色、リーフグリーン等）、植物由来の染料の色（紅色、藍色、茶色等）がある。(2)の動物由来の色には、毛や羽の色（朱鷺色、ラクダ色等）、動物由来の染料の色（セピア、臙脂色等）がある。(3)の飲み物の色として挙げられているのは、ワインの色（ワインレッド、バーガンディ）で、食べ物の色としては卵色、サーモンピンクが挙げられている。(4)の宝石・金属の色には、金色、銀色、ブロンズ、瑠璃色、珊瑚色、などがある。(5)自然関連の色には、黄土色、砂色、空色、カーキ、などがある。(6)

の人名由来の色には、芝翫茶、利休茶などがある。(7) 地名由来の色名には、プルシアンブルー（プロシア由来）、マゼンタ（北イタリアの都市名に由来）などがある。

2.3 チョコレート色

2.2 でみたように、加工飲食物（果物や野菜などの自然物そのものではなく加工されたもの）が色名になっている例は、多くない。

「JIS Z 8102 物体色の色名」269色の中で加工飲食物に由来する色名を探すと、「チョコレート」「ココアブラウン」「クリームイエロー」「ワインレッド」「バーガンディー」「ボルドー」「からし色」「抹茶色」のみであった。これらの他に、加工飲食物に由来する色名はないのだろうか。ネイチャー・プロ編集室（1996）に「コーヒブラウン」「ビスケット」「飴色」がある。清野・島森（2005）に「キャンディブルー」「クラレット」「レーズン」がある。天野（1980）には「羊羹色」があった（丸山（2012）では「百入茶」の項目の中で「羊羹色」が言及されている）。つまり、自然物が由来となった色名の多さに比べて、加工飲食物のような人工物が由来となった色名は、ごく少ないようである。「チョコレート色」は、加工食品由来という点で、色名の中では珍しい類のものだと言えそうである。本稿では、この「チョコレート色」に注目し、次の疑問について考えていきたい。

疑問1 「チョコレート色」によって形容される対象は、どの程度広い範囲にわたるのか。

疑問2 「チョコレート色」は「チョコレート」の具体的性質とどの程度関連するか。

疑問3 「チョコレート色」はどの程度、抽象化されているか。

3 「チョコレート色」の使用状況

「青空文庫コーパス」（茶漉）と「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」を用いて、「チョコレート色」を検索する。比較のために「コーヒー色」「ココア色」も調べる。合わせて、「チョコレート」「コーヒー」「ココア」の出現数も見る。

3.1 「青空文庫コーパス」(茶漉)の検索結果

「茶漉」で「青空文庫コーパス」を検索した結果が表1である。

表1 「青空文庫コーパス」(茶漉)の検索結果

色の名前	出現数	物の名前	出現数
チョコレート色	0	チョコレート*	0
コオヒイ色	0	コオヒイ	4
コーヒー色	0	コーヒー	43
珈琲色	0	珈琲	106
ココア色	1	ココア**	2

*チョコレート, チョコレト, チョコレイト, チョコレエト, 貯古のいずれもゼロ

**「ココア」2件のうちの1件が「ココア色」

「チョコレート色」と「コーヒー色」はゼロで、「ココア色」が1件のみ出現した。一方、「チョコレート」はゼロ件、「ココア」は2件、「コーヒー」はカタカナ表記は40件ほどだが漢字表記の「珈琲」は100件を超えた。「茶漉」の「青空文庫コーパス」には、青空文庫収録の文学作品のうち現代語で書かれたものが収められており¹、総語数は8,370,720語である。このコーパスの範囲では、コーヒーは小説類に時々登場していたがチョコレートやココアはほぼ登場しなかったものと見える。そしてコーヒーを指す語は広まっていたものの、「コーヒー色」という語の使用にまでは発展していなかったようだ。

では「ココア色」はどうか。青空文庫コーパスにおける「ココア色」の用例(1件のみ)を次に挙げる(下線は本稿筆者による)。

(1) 夜になって襲来した暴風雨が、街から灯火を奪った。午後と、午前の境界にもかかわらず、ラジオが、倫敦から放送される歌謡を伝播していたのを疾風のなかで私は嘸み下した。ココア色の女の皮膚に雷紋の入墨をしたような夜更けであった。皺だらけの私の寢室をノックする音がして、暗闇から出た女の手が、楕円形の天井をみつめていた私の目前で葡萄蔓のようにからんで、青いリノリウムのうえに MELINS の扱帯が夜光虫のように円をつくると、私は断截された濡れた頭髪を腕の中に感じて、いつのまにか恋愛のマッフのなかに、ひとときの安息を求めた。

(吉行エイスケ著「大阪万華鏡」, 1930年, 『文学時代』誌に発表)

この用例を見ると、ココア色は「女の皮膚」の色を形容しているように見え、「ココア色の皮膚」というと黒人の肌を連想させるのであるが、この短編小説に黒人は出てこないようである²。「ココア色の女の皮膚に雷紋の入墨をしたような夜更け」と続いているので、激しい雨降りの後の薄暗く湿気の多い夜更けの風景を描写する表現の一部として「ココア色」の語が使われているのではないか。「歌謡を伝播」していたのを「嘸み下し」た

り、「皺だらけの寝室」があつたり、女の手が「葡萄蔓」のように絡んだり、とユニークな比喻表現が頻出する中で、「ココア色」が使われている。これをきっかけに「ココア色」という表現の一般化が進むような使われ方がされたというのではなく、作家吉行エイスケの文章表現の創意工夫の中で使われた希少な例とみて良いだろう。

3.2 「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」の検索結果

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」における各語形の出現数を表2に示した。

表2 「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」の検索結果

色の名前	出現数	物の名前	出現数
チョコレート色	35	チョコレート	1, 320
コーヒー色	16	コーヒー	4, 562
ココア色	2	ココア	420

表2を見ると、表1の青空文庫コーパスで見たのと同様、「チョコレート」「コーヒー」「ココア」の検索結果は「コーヒー」が最も多い。すなわち、「コーヒー」が書き言葉に現れる頻度は、「チョコレート」「ココア」よりも高い。

表1の青空文庫コーパスのデータの時代には「チョコレート色」「コーヒー色」「ココア色」はほとんど使われていなかったようだが、青空文庫コーパスに比べると新しい「現代日本語書き言葉均衡コーパス」のデータにおいては、「チョコレート色」「コーヒー色」「ココア色」が出現している。社会にモノが流布するとともに「〇〇色」の語も使われるようになったようである。「〇〇色」の形になると、「チョコレート色」が最も多く、ついで「コーヒー色」、「ココア色」の順になる。書き言葉において「〇〇」が出現する頻度と、「〇〇色」が出現する頻度とは、必ずしも比例しないようである。表2と同じ「現代日本語書き言葉均衡コーパス」における「〇〇色」の出現数をジャンルごとに示したのが表3である。

表3 BCCWJのジャンルごとの出現数

色の名前	書籍	雑誌	Yahoo!ブログ	Yahoo!知恵袋	合計
チョコレート色	26	3	4	2	35
コーヒー色	16	0	0	0	16
ココア色	2	0	0	0	2

用例をいくつか挙げる（下線は本稿筆者による）。

(2) コートニイはアパートメントを出る前に、クリーム色のシルクのブラウスとチョコレート色の革のスラックス、同じ色のブーツに着替えていた。

(ウェイン・D・ダンディー著／佐々田雅子訳『燃える季節』, 1990年, 文藝春秋)

(3) キブシの木にも、明春の花穂が、チョコレート色にのびていました。

(福永令三著『赤いぼうしのクレヨン王国』, 1991年, 講談社)

(4) しかし、眼下に広がるのはチョコレート色の岩の平原で、わが国の学者は岩砂漠と呼ぶ。

(牟田義郎著『オリエント五〇〇〇年の光芒』, 2001年, 中央公論新社)

(5) もう、かれこれ何十年とお世話になっているチョコレート色でお馴染みの阪急電車です。

(Yahoo!ブログ, 2008年)

(6) 髪は濃いブラウンで、肌もコーヒー色をしている南米系の男。

(新堂冬樹著『闇の貴族』, 2002年, 講談社)

(7) そこには、コーヒー色をしたみごとな羽が一枚落ちていたのです。

(茂市久美子著『つるばら村のくるみさん』, 2003年, 講談社)

(8) 名梨が吐く血は、鮮やかな赤色ではなく、コーヒー色に濁っている。

(川辺敦著『私はナース』, 2005年, 早川書房)

(9) 朝倉が車ごと乗り入れるとココア色のカーディガン姿の昭直が笑顔で出迎えた。

(安西水丸著『夜の草を踏む』, 2004年, 光文社)

「チョコレート色」の用例は 1990 年から 2008 年にかけて、「コーヒー色」の用例は 2002 年から 2005 年にかけて、「ココア色」の用例は 1996 年と 2004 年の出現であった。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の「書籍」データは 1971 年から 2005 年にかけてのものであり、コーパス作成に際しては年代に偏りなくサンプリングが行われていることから、1990 年代以降に「チョコレート色」「コーヒー色」「ココア色」が使われるようになったとみてよさそうである。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」のジャンル（サブコーパス）には、書籍、雑誌、新聞、白書、教科書、広報紙、Yahoo!知恵袋、Yahoo!ブログ、韻文、法律、国会会議録がある。そのうち、新聞、白書、教科書、広報紙、韻文、法律、国会会議録には、「チョコレート色」「コーヒー色」「ココア色」のいずれも出現せず、出現したのは表3に示した通り、「書籍、雑誌、Yahoo!ブログ、Yahoo!知恵袋」であった。より公共的な性質の強い媒体（新聞、教科書、広報紙、国会会議録）や、文体の改まり度の高い媒体（白書、法律）では、使われないのであろう。個別性の高い媒体（書籍、Yahoo!知恵袋、Yahoo!ブログ）や、文体のカジュアルさが許容される媒体（雑誌、Yahoo!知恵袋、Yahoo!ブログ）において使われるものと思われる。

次に、「チョコレート色の〇〇」35例の「〇〇」を分類・列挙したのが表4である。

表4 BCCWJにおける「チョコレート色」の形容対象

	自然			人工物	
	動物	植物	環境等	衣服や布類	衣服以外
書籍	髪2 瞳と口髭 肌（人間） 肌（女神と男神） 馬3 犬4	花穂 花	岩 泥 世界	革のスラックスとブーツ コーデュロイの上着 モケット（布地） カーペット	三角屋根 羽目板 タイル サロン 車
雑誌	犬	アネモネ		服	
Yahoo ! 知恵袋 Yahoo ! ブログ	人体の一部 犬				ヘアカラー 家具 電車 車

「チョコレート色」は、自然物も人工物も形容できることがわかる。

自然物の中では人間の身体の一部、馬や犬の毛並み、花、などの生物だけでなく、岩や泥のような生物以外の自然物にも使える。人工物の中では、衣服や布類が多いが、家の外装や内装、家具や車体の色にも使える。

4 考察

2.3であげた3つの疑問について、考察していく。

【疑問1 「チョコレート色」によって形容される対象は、どの程度広い範囲にわたるのか。】

前章で述べた通り、「チョコレート色」は自然物も人工物も形容できる。自然物としては、哺乳類（人間、馬、犬）の体の色、花、岩や泥を形容できる。人工物としては、衣服や布類のほか、家の外装・内装、家具や車体の色を形容できる。

すなわち、柔らかいものも硬いものも、温かいものも冷たいものも、薄いものも分厚いものも、数センチのものも1メートル以上のものも、形容できる。つまり形容する対象は濃い茶色を帯びるものであれば相当に広い範囲にわたっており、偏りが無いようにも思える。ただし、革やコーデュロイ、タイルや車体、などがあることから、光沢のある物体に使われる傾向があるのではないかと考えられる。

「きつね色」であれば「こんがり焼けた状態（肌もしくは食べ物）」、「ラクダ色」であれば「冬用下着」が連想されるが、「チョコレート色」にはそのような決まった連想対象は存在しないようである。

【疑問2 「チョコレート色」は「チョコレート」の具体的性質とどの程度関連するか。】

疑問1についての説明で述べたとおり、「チョコレート色」の形容対象は広範囲にわたっている。まず、チョコレートの性質の一つである甘い味は、形容対象の属性とは全く関係がない。次に、チョコレートの形、サイズ、硬さも、形容対象の属性とは全く関係がない。光沢のある焦げ茶色³、という性質だけが、形容対象との共通点であると言ってよいだろう。

ただ、「チョコレート」の甘い味は「チョコレート色」と関係がないのだが、甘さは人にとってうっとりとした強い快感につながる。形容対象は、おおむね美的なものであると言ってよく⁴、目に快いものである。快い感覚を与えるという点で、チョコレートの性質と繋がっているといってもいいだろう⁵。

【疑問3 「チョコレート色」はどの程度、抽象化されているか。】

疑問1・疑問2に関して説明した通り、「チョコレート色」はチョコレートの持つ「光沢のある焦げ茶色」と「快さを与えるものという性質」が活用されており、さまざまなものを形容することができる。すなわち、色彩を表す語として、抽象化が相当に進んでいると言ってよいだろう。

5 終わりに

チョコレートとコーヒーを比べると、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」の検索結果においては、「コーヒー」が「チョコレート」の3倍以上であったのに、「コーヒー色」は「チョコレート色」の半分以下であった。「〇〇」が世の中に流布している程度が高いからといって「〇〇色」が直ちに流布するわけではないと言えそうだ。チョコレート色がコーヒー色よりも多かった理由はなんだろうか。証明するのは難しいが、疑問2に関する説明のところでも述べたように、「チョコレート」の持つ強い「甘さ」からくる「快い感覚」が、「チョコレート色」の広がりに関係しているのではないだろうか。

「コーヒー色」は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では16件と少なく、しかも同じ筆者が同じ書籍の中で2回使っている例が2件、3回使っている例が2件あり、まだ

まだ広く使われているとは言えない状況である。また 16 件のうち肌の色に使われた例が 3 件、ドレスや羽の色が 3 件、しかし最も多かった 6 件は吐瀉物、便、血、羊水の色を示すものであった。少なくとも「現代日本語書き言葉均衡コーパス」のデータにおいては、「コーヒー色」は健康的でない体液類の色を表す使い方が多いのである。コーヒーの香り高さや美味しさのイメージではなく、光沢のない茶色の、あまり美的でないイメージが活用されているようであった。

古来、色名が作られるに際しては、誰にとっても身近に存在し、目に入りやすいものである自然物の色を借用することから始めるのが自然な流れだったのだと考えられる。植物、動物、そのほか自然界にあつて目立つものの色を使うことが色名作成の基本であり、その次に、歴史的な経緯によって人名や地名にちなんだ色名が作られ、使われるようになったのだろう。そうした中で、加工食品由来の色名は比較的新しく、数少ない存在である。

「チョコレート」は人々に広く人気があり、強い甘さという快い味を持ち、かつ光沢がある見た目という特徴を持つことから、「チョコレート色」が色名として採用され、広がりつつあるのではないかと考えられる。

【注】

¹ 収録作品の作者は、宮沢賢治、新美南吉、夏目漱石、横光利一、夢野久作、芥川龍之介、有島武郎、太宰治、国木田独步、伊藤左千夫、梶井基次郎、岡本かの子、菊池寛、幸田露伴、泉鏡花、織田作之助、岡本綺堂、辻潤などである。

² 黒人は出てこない「ようである」というのは曖昧だが、この小説はわかりにくい比喻が多く、はっきりしない。少なくとも明示的には黒人は出てきていない。わかりにくい比喻の例を挙げると、たとえば「赤鼻女」という語が出てくるが、よく読むと「商工都市大阪は、ウォール街を恐怖がおそうと同時に、赤鼻女の野暮なアメリカの衣裳をつけて財界の迷路に立った。」とあるので、実際には「赤鼻女」という人間が小説内に登場したわけではなくて、大阪という都市がアメリカ大恐慌の影響を受けた、という意味のようである。

³ 「JIS Z 8102 物体色の色名」で定められている「チョコレート」は「マンセル値 10R 2.5 / 2.5」「CMYK 61 79 81 40」「RGB 82 55 47」であるが、各種色名辞典における説明には、揺れがある。清野・島森（2005）では「チョコレート」は「黒みの茶色」とあり、小学館辞典編集部（2002）では「チョコレート」は「ごく暗い黄赤」「焦げ茶色をイメージする」とあり、ネイチャー・プロ編集部（1996）では「チョコレート」は「暗い灰みの茶色」とある。

⁴ 「青空文庫コーパス」と「現代日本語書き言葉均衡コーパス」には出現しなかったが、CiNii で検索すると、「チョコレート色」は「痰」や「血液」や「囊腫」の形容に使われる例が見つかる。卵巣子宮内膜症性嚢胞は「チョコレート嚢胞」と呼び習わされている。そのように、粘り気のある茶色の血液の塊について「チョコレート」「チョコレート色」で形容する慣習が医学の世界にあるようだ。これは色だけでなく質感

も「チョコレート」に似ているものとして形容されているのだろう。

⁵ 俵万智の歌集に『チョコレート革命』がある。歌集の中の「男ではなくて大人の返事する君にチョコレート革命起こす」という一首から取られたタイトルで、「君に向かってひるがえした、甘く苦い反旗。チョコレート革命とは、そんな気分をとらえた言葉だった。」と「あとがき」に書かれている。「チョコレート」という語が持つ、強い甘さのイメージとだけでなく、「苦さ」イメージも合わせて活用し、「革命」という激しいイメージの語と組み合わせることで文学上の効果をあげようとしたものかと考えられる。「チョコレート色」が使われる際に「甘さ」だけでなく「苦さ」イメージも合わせて活用されるかどうかについては機会を改めて検討したい。

【参考文献】

- 天野節，1980，『色名綜覧』錦光出版。
近江源太郎，2008，『色の名前に心を読む——色名学入門』研究社。
島森功，2021，「色の名前のはなし」『日本語学』40-3: 54-65。
小学館辞典編集部，永田泰弘監修，2002，『新版 色の手帖』小学館。
尚学図書，1986，『色の手帖』小学館。
清野恒介・島森功，2005，『色名事典』新紀元社。
俵万智，1997，『チョコレート革命』河出書房新社。
日本色彩学会，2011，『新編色彩科学ハンドブック 第3版』東京大学出版会。
ネイチャー・プロ編集室，近江源太郎監修，1996，『色々な色』光琳社出版。
丸山伸彦，2012，『日本史色彩事典』吉川弘文館。

【資料】

現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」検索

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>（検索は2023年10月27日）

「茶漉」青空文庫コーパス

<http://telldev.cla.purdue.edu/chakoshi/public.html>（検索は2023年10月27日）

【編集後記】『現象と秩序』第19号をお届けします。

今号は巻頭に、気鋭の社会学者である岡村逸郎氏によるテレビアニメ作品論を配し、本誌の読者数の飛躍的増大を狙っています。どうか、周囲のアニメ研究者や文化社会学研究者にお勧めください。さらに、内容を読んで頂くとわかるように、青年論や死の社会学としての側面も持った論考になっています。この多面性こそは、学際誌としての本誌の特徴を上手に活かした議論の仕方になっていると思います。

第2論文は、村中淑子氏による色彩語研究論文です。出だしが魅力的です。村山由佳のエッセイ（『命とられるわけじゃない』）の中での「チョコレート色」の使われ方から話題を立ち上げて、これまでほとんど研究されてこなかった＜外来語名詞＋色＞に関するチャレンジな議論を展開しています。言語学に関心がある読者だけでなく、社会のなかで様々な意味が相互にどのようにネットワークを形成しているのか、ということに関心を持っている（広義の）社会学者にも興味深い論考になっています。

第3論文は、身体論を専門に研究している堀田裕子氏による、これもチャレンジングな議論です。「鏡」は、人間ではないにもかかわらず「試着場面」においては、「試着者」と「店員」の両方が「鏡」に写っている客の画像を中核的関心対象として扱っています。堀田氏は「鏡はアクターだ」とまでいいます。その主張の適否をどうぞ吟味して下さい。

第4論文は、樫田による「暗号の社会学」です。今回扱っているのは「公務員試験問題の“教養試験”の中の“判断推理”という一群の問題群の中の“暗号問題”」ですが、じつは人間は「暗号」をめぐる社会的期待と期待の摺り合わせをしています。そのような人間ネットワークの在り方の中に公務員試験の「暗号」もあるのだ、という大きな論考の一部として、今回の論考は構想されています。次稿も請うご期待、です。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2023年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）

編集委員：樫田美雄（摂南大学）、中塚朋子（就実大学）、加戸友佳子（摂南大学）

編集協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第19号 2023年 10月31日発行

発行所 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

摂南大学 現代社会学部 樫田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 072-800-5389 (樫田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>
